

論文の内容の要旨

論文題目 フランス語作家マリーズ・コンデとアフリカ——アメリカ——アンティユの往還

氏名 大辻 都

カリブ海アンティユ諸島のフランス海外県グアドループに生まれたマリーズ・コンデはフランス語を第一言語として育ち、フランス語で創作をおこなってきた作家であるが、この作家がそのような環境に育ち、創作の言語にフランス語を選択したということには、過去にさかのぼる歴史の偶然が多分に関与している。

南北アメリカ大陸およびアンティユ諸島が 15 世紀末に「発見」されて以来、ヨーロッパの国々は競ってこれらの土地に入植し、熱帯産品を生産するため、アフリカから労働力としての奴隷を運び込んだ。200 年にわたる奴隷制時代、「白人」植民者と「黒人」奴隷はこの新しい土地に共存し、両者の混血の人口も増加する。

仮にグアドループがフランス以外の国に占領されていたら、祖先を乗せた奴隷船の向かう先がフランス領でなかったら、祖先が奴隷狩りを免れ、部族の言語を捨てずにすんだら、コンデは別の言語で書いていたかもしれない。このようにコンデがフランス語で書くことは、大西洋をはさんだ広大な地理的空間を舞台とする歴史の経緯と切り離すことができない。

出生した時点からこうした歴史的経緯をその身に被っているだけでなく、作家コンデはその個人的な生においても複数の場所と関わってきた。

1950 年代半ば、パリの高校に留学したコンデは、ファノンが『黒い皮膚・白い仮面』において述べたような、他者からの視線にさらされる。その頃、同じアンティユ出身の詩人エメ・セゼールの長編詩『帰郷ノート』とネグリチュードの世界観を知り、自らアフリカに赴いて 10 余年を過ごす。アイデンティティを求めてのこの滞在は挫折に終わるが、作家としてのコンデはこの

地点から始まっている。その後コンデは故郷グアドループへの帰還を果たし、さらにアメリカ合衆国へも向かい、アンティユと合衆国を行き来しつつ創作を続けてきた。

タイトルである「アフリカ——アメリカ——アンティユの往還」とは、作家マリーズ・コンデの現実の移動であるとともに、彼女の創作における想像力の射程と運動とを意味する。アフリカ、アメリカ、アンティユのそれぞれは本論で考察する作品の拠りどころとなるが、これらはある期間身を置かれ、通過されて終わる場所ではなく、作品にとっての進化・発展の段階を表わしているわけでもない。マリーズ・コンデとは、広大な時空間におよぶ歴史の痕跡と現実の移動がおよぼす影響を自らの身体と言語に刻みつけた作家ということができ、本論では、そのような作家の身体性と創作が深く関わっていることを明らかにする。

また、本論には上記以外の目的もある。フランスでは 80 年代終わり頃から、コンデを含むアンティユ出身作家たちをグループとしてとらえ、「クレオール文学」と名指す潮流が生まれた。アンティユのプランテーションで発達した口承言語であるクレオール語とそれに基づくクレオール文化に価値を見出し、フランス共和国的な普遍性に対置されるものとしての「多様性」や「クレオール性」という造語を編み出して、アンティユの新たなアイデンティティのあり方を提示したパトリック・シャモワゾー、ラファエル・コンフィアンらの著書『クレオール性礼賛』(1989)がその契機となる。

しかし、同じフランス語を用いて表現をする作家でありながら、個人と言語との関係はそれぞれに異なっている。「クレオール文学」においては、何よりもクレオール語が重視されるが、同化主義傾向の強い家庭で育ったコンデの場合、ダイグロシアの島にありながら、私的空間においてもフランス語が第一言語であり、個人と言語との関わり方は他のアンティユ作家と異なっている。また、「クレオール性」の作家たちがマルチニック出身であり、アンティユ世界をマルチニックをモデルとして考えた上で発信しているのに対し、コンデの場合、人種構成や歴史的経緯において差異のあるグアドループ出身だという点での違いもある。

さらにコンデが女性の書き手であることにも言及しないわけにはいかない。歴史的に、アンティユの女性たちがヨーロッパ人男性の一方的な性的興味の対象とされ、一定のイメージをもたれてきたこと、そしてそのような対象であった存在が現在書き手に転じているのだという事実は指摘しておくべきだろう。またこのことと関連するが、奴隷制を経たアンティユ社会の問題はしばしばはっきりジェンダー化されたかたちで表出してくる。アンティユの男性作家が焦点化しない要素をていねいに掬い上げ、そこから想像力を広げるコンデの作品に向き合うことには十分に意味があり、日本においてフランス語圏アンティユ文学を、さらにはフランス語文学を読解するにあたり、一助になると考える。

本論文は 2 部構成である。第 1 部では作家マリーズ・コンデを生み出したアンティユについて述べる。

第 1 部第 1 章では、20 世紀以降のアンティユ思想史をふり返る。セゼール登場以前の 1920 年代に遡り、「黒人」知識人台頭時のパリの状況を概観し、セゼールのネグリチュード、ファノ

ンによるアンティユ人の精神分析、グリッサンと「クレオール性」の作家たち、さらにコンデらが「クレオール性」宣言に対して投げかけた批判までの流れを検討する。第 2 章では、アンティユの女性たちがヨーロッパ人たちによりどのように表象されていたかを過去の文献にたどり、また彼女たちがどのように自ら筆をとったのかを見る。植民地時代の宣教師や航海家の記述を確認するとともに、19 世紀を生きた 3 人のヨーロッパ人作家——クレール・ド・デュラス、ラフカディオ・ハーン、ギ・ド・モーパッサンが描く文学作品の中のアンティユ女性が検討される。

第 3 章は、描かれる対象としてのアンティユ女性をテーマとした第 2 章を受け、19 世紀後半以降に現れたアンティユ女性作家に焦点を当てて、その文学史を構成する。特に 1920 年代以降に現れた何人かの重要な作家：シュザンヌ・ラカスカード、シュザンヌ・セゼール、ミシェル・ラクロジル、シモーヌ・シュヴァルツ＝バルトについては個別に取り上げて論じる。彼女らの作品の中にはネグリチュードの萌芽というべきテーマもあれば、「クレオール性」に先んじたクレオールの価値の肯定も見られ、現代アンティユ文学を準備する先達の作品群として言及するにふさわしい。あるいはアンティユ女性作家特有の問題系も存在する。母子関係が強調されるアンティユ独自の家族形態は、母という観点から複数の作家たちにより扱われており、また、クレオール社会におけるアンティユ女性とフランス文化の近親性がテーマとされることも多い。

第 2 部では、全 5 章を通じてコンデの主要な 6 作品について考察する。第 1 章にあてられている「アフリカ」、第 2 章、第 3 章にあてられている「アメリカ」、第 4 章、第 5 章にあてられている「アンティユ」の大タイトルは、作品の中心となる場所を示しながら、それぞれの作品には同時に他の場所との関連も見出せる。作品が必ずしも発表順に論じられないのは、この 3 つの場所への志向により作品を分類しているためである。

第 1 章では自伝的ともいわれる最初の小説『ヘレマコノン』を取り上げ、アフリカ大陸にアイデンティティを求めてやってきたアンティユ女性の挫折体験——すなわちアンティユとアフリカの文化的齟齬の体験について検討する。第 2 章ではいくつかの「アフリカもの」を経たコンデが試みた、実在の奴隷女性をモデルとする歴史小説『わたしは魔女ティチューバ』を取り上げ、アンティユ文学では重要なテーマとされる英雄としてのマロン[逃亡奴隷]に対する批判ともいべき母子関係から見るマロナージュについて検討する。第 3 章では高貴なアフリカの血を抛りどころとする夫婦を扱った『最後の預言王たち』に、アンティユ人とアフリカ系アメリカ人の接点と距離を見る。また両者が共有するものとして、口承で伝わる民話のアナンシ[蜘蛛の姿をしたトリックスター]にも言及するが、このアナンシの形象はアンティユ帰還以降のコンデ作品を読み解く鍵として、続く章でも引き続き扱ってゆく。第 4 章ではあるアンティユの一族の人々をめぐる年代記、『悪辣な生』を扱う。世界を彷徨しつつ生きる人物たちとそのアイデンティティのあり方を考察しながら、一族の娘である語り手による語りが生むアナンシ的形象——アンティユから外の世界へ散らばる人々のネットワーク——についても検討する。第 5 章では、90 年代のコンデの作品に顕著である複数人物たちによる多声的で断片的な語りについて考察する。この最後の章では、この特徴がそれぞれ表れているふたつの小説、『マングローヴ渡り』と『移り住む心』を同時に扱っている。前章、前々章で扱ったアナンシの糸の形象は、ここではマ

ングローヴの水平的な形象へと引き継がれる。またその形象のもとに表される周縁的人物たちの連带的関係は、第2章で提示されたマロナージュの形態とも結びつけて考える。

作品を概観してわかるように、コンデはアンティユの文学を強く意識して創作にのぞむ一方で、他の作家とは異なり、クレオール語をその基盤にしようとはしておらず、また、クレオール性の作家らが明確に示したような理念や理論への志向は見られない。彼らの理念形成にフランス共和国への対抗意識が関与するのはまちがいないが、コンデにおいては、共和国は乗り越えるべき何かとして措定されていない。そこに見られるのは、共和国という父ではない自らの父を立ち上げようとの欲求——あるいは自らの名を獲得しようとする意志——をもたないまま、世界との関係を生きようとする自由な作家の姿である。